

活動状況報告書（1月分）

文化芸術コース 荒川 真央

1月は私にとって“精神面”でとても大きな学びを得た月となりました。

相次ぐ卒業試験・入学試験・レパトリー試験・発表会・演奏会で学生も先生方も鬼気迫るこの時期、私は Vortragsabend=門下発表会に出演させて頂きました。この機会に私が学び、猛省したのは“自分自身の甘さ”についてです。

本番の緊張感の中で普段しない失敗をしてしまう、ということは誰もが経験し得ることでありますが、私もまた今回の舞台では演奏中に様々なミスをしました。どれだけ本番前にかげられる時間はすべて費やした、という気持ちで挑んでも、ミスをしたということはつまり鍛錬が足りなかったということ。ある先生からの「Warum? (何故ミスをしたと思う?)」という問いに対してもそう答えました。ですが、先生がそういうことを聞きたかったわけではないことはすぐに読み取ることができ、プロとして生きていくために常に自分と向き合い失敗も成功もその理由を考え続ける必要があること(今回の場合は私の上半身のフォームに問題がありました)、今私がいる場所は、ミスをしなくなるまで時間を費やし鍛錬をする場所なのではなく、どんな状況でもどんな舞台でも必ず成功させるための術を(“それぞれの考えや価値観を持ったプロフェッサーや先生に賛同し”)身に着けるための期間・機会であるのだと気づかされました。

“ミスをしないために” “成功させるために” この二つは似て非なるもの。この気づきの大きなきっかけを与えてくれたのは一人の韓国人留学生です。残念なことに、門下生の一人である彼は、数週間前に母親の訃報を受け一時帰国、直前にドイツに戻り迎えた本番の舞台でした。彼がどのような精神状態であったか、どれほど大きな悲しみに包まれていたのか計り知れません。ですが“ミスをしない”ことよりもただ一身に“自分の音楽を全う”した彼の演奏はそれは芸術的で洗練された見事な演奏でした。ドイツは国家演奏家資格を取得することで【音楽家】という職業を正式に名乗ることのできる国です。どんな場合でも本番の舞台がある限りそこに立たねばならないし、失敗は許されない、ですがそういう覚悟を早くから持った若者が学生として多く、音楽大学に学びに来ているのだと思います。韓国人の彼もまたそのうちの一人であることを体現してみせてくれました。そしてこの一連の出来事はこの数年どこか中途半端で成長しきれなかった私に“プロ”になるための最後のチャンスを与えてくれたような気がしています。

2月はレーガー作曲、ピアノソロ(テレマンの主題による変奏曲)、クラリネットソナタ 2 作品、連弾 1 作品が課題曲です。思いがけずアンサンブルの機会が少しずつ増え、先生や友人、共演者の力を借りながら“覚悟”とともに頑張ります。



①門下発表会



②門下発表会



③門下発表会

ÖFFENTLICHER VORTRAGSABEND

MUSIK FÜR KLAVIER

Studierende der Klasse
Prof. Hans-Peter Stenzl



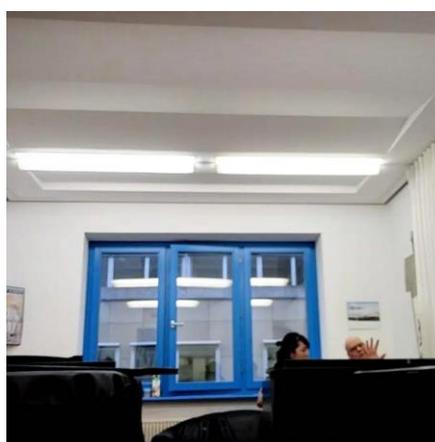
Freitag, 19. Januar 2024
19 Uhr
Kammermusiksaal

Staatliche Hochschule für Musik und Darstellende Kunst, Ur-Namen: 23, 70342 Stuttgart, Tel. 07141 2324827

④門下発表会プログラム

Wolfgang Amadeus Mozart
(1756-1791) Neun Variationen in D-Dur über ein Menuett
von Jean Pierre Dupont KV.573

Mao Arakawa



⑤門下発表会プログラム

⑥レッスン風景 Prof. Hans-Peter Stenzl



⑦レッスン風景



⑧卒業試験